

第4節 四万十川下流域における古代の土器 -まとめと展望-

はじめに

今次検出された遺構のうち、古代のそれが占める割合は僅かである。しかし、基本層準 層が古代前期から後期に及ぶ遺物包含層であり、より上層からの出土分も含めて、当該期の遺物を一定量得ることができた。本節ではこれらの遺物の位置付けを試みるが、資料の性格による限界もあり、他遺跡の資料や成果も援用・比較する。下ノ坪遺跡は土佐中央部に位置するが、現在土佐では最も充実した古代の土器群が出土している。船戸遺跡と風指遺跡は、これまで土佐西南部としてはまとまった古代の出土資料が知られていた遺跡である。立地はいずれも四万十川下流から中筋川へ若干遡った川沿いに所在する。以下、同地域を中筋川下流域と呼称する。地勢や遺跡の位置については第 章を参照されたい。

さてここで、本稿で引用することの多い下ノ坪遺跡と船戸遺跡について、古代を中心に概要を述べる。下ノ坪遺跡は、既知の遺跡が最も多く集中することが知られる高知平野東部の物部川下流沿いに位置し、弥生後期前葉、古墳後期、古代の各時代の遺構・遺物が検出された。特に律令期においては遺構・遺物が濃密な区域があり、大型の掘立柱建物群も検出されている⁽¹⁾。土器も奈良時代前半から平安時代前半を中心に多量に出土しており、各種の遺構より出土した土器群は土佐の基準資料となっている。船戸遺跡では、縄文から中世の遺物が出土している。検出された流路と掘立柱建物群は古代から中世に属する。古代の土器は流路と包含層から各時代の遺物と共に一定量出土しており、層位から古代の中での時期を細分することはできない。

食膳具

まず、時期を把握し易い食膳具について検討し、煮炊具については後述する。以下、特記しない限り食膳具について述べる。

1. 分析の方法

以下のような方法で作成したTab.97を、基本的な検討資料とする。対象とした遺物は、今次調査では 層・ 層を中心とする全出土遺物、船戸遺跡ではSR1、SR2、SR3及び包含層出土遺物の未報告分や細片も含めた全てである。その他の遺跡では原則的に報告された遺物を対象とし、例えば下ノ坪遺跡では特に報告書の表6なども使用した。時期比定には註2、註3を指標とする。これらは、 期については下ノ坪遺跡出土資料を軸としている。土佐では当該期の土器編年に実年代を附与できる段階ではなく、参考のため註2と3で示された搬入品をTab.96にまとめた。今次調査⁽⁴⁾と船戸遺跡から出

期		搬 入 品
	2	平安 期中
	3	
	4	
	5	
	6	
	7	
	1	平安 期中～新
	2	
	3	
	1	篠窯伊野H期
	2	
	3	
	1	虎溪山1号ないし丸山2号
	2	
	3	
	1	楠葉型黒色土器B類碗
	2	
	3	
	1	白磁碗 類
	2	
	3	
	1	龍泉窯系青磁碗-2類, 皿 類
	2	
	3	
	1	和泉型瓦器森島-2期
	2	
	3	

Tab.96 土佐の土器編年と搬入品

期	土師器・土師質土器												黒色 土器	須恵器							
	皿	杯	碗	(底部)			蓋	高杯	(赤彩)					杯	皿	杯	(底部)			蓋	高杯
				杯A	杯B	皿B			皿	杯・碗	蓋	高杯					杯A	杯B	杯C		
I-2	11	16		2	5	3	6	4	4	5	1		6	40	2	11	13	39	2		
I-3	17	8		2	1	2	8	6	14	4	5	4		2	24	17	10	2	29	1	
I-4	6	7		3	9		6	3			1			23	63	28	23		116	8	
I-5	26	28	2	13	2	1	9	3	5	1				27	50	31	7		18	5	
I-6	23	38	2	27	5		13	9		1			1	15	38	19	7		3	2	
I-7	58	79		124	24	2	45	10		1			5	44	117	82	22		86	8	
II-1	23	74		42	2		6						1	4	3	1	2		11		

報告の表6を改変。遺構出土遺物による。

Tab.97-1 下ノ坪遺跡H区

期	土師器・土師質土器						黒色 土器	須恵器								不明	その他	
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯 A		杯	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺			甕
			平底	有台							平底	有台						
I 不						1		8	108	45	49	29		9	13	皿か杯7	2,皿B1	
I-4~5	5	2	3	2				12	21	11	49	53	18			皿か杯1	皿B1	
I-6~7	3	2	2	2	1			39	7	7	14	17						
II	5	4	3	7			4										緑7	
III																	碗9	

Tab.97-2 具同中山遺跡群(今次調査)

期	土師器・土師質土器						黒色 土器	須恵器								その他
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	杯・碗	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺	甕	
			平底	有台						平底	有台					
I 不	皿B1				1	1		3	21	19	17	2		20	8	壺蓋1
I -2~3									7		2	13				
I -4~5	1			1				10	31	21	37	34	1			
I -6~7		1	2	2				29	24	16	36	22				
II -1~2	14	5	9	26			3		1		4					
II ~III -1	4	7	47	2												緑12,灰3, 篠鉢3
III	2	2	1											1		碗か杯1
不可分															4	

Tab.97-3 船戸遺跡

- 1.「I不」は、I期であることは認めるが、小期が不明なもの。「不可分」は時期不明なもの。
2. 原則として口縁部でカウントした。
- 3.(底部)(杯底部)(赤彩)は独立したカウント数である。つまり、(底部)に数えられたもののうち、口縁部まで残存するものは該当器種に重複して数えている。(赤彩)先土師器の該当器種に重複している。
- 4.「有台」は有高台、「緑」は緑釉、「灰」は灰釉陶器。
5. その他、註6参照。

Tab.97 時期・器種別出土遺物点数

土した土器は、資料の性格上各個を一小期に確実に比定することが困難な場合が多いので、例えば 期については -2~3期、 -4~5期、 -6~7期という幅を持たせて区分した⁽⁵⁾。このような区分でもなお比定困難なものについては、比定不可能分として表示した。 ~ 期については今次調査と船戸遺跡で傾向に差があることと、土佐西南部の編年の不明瞭な部分の為にやや異なる区分となった。具体的には後述する。

2. 成果と考察

上記のような方法により、Tab.97を作成した。これをもとに以下の項目について検討する。

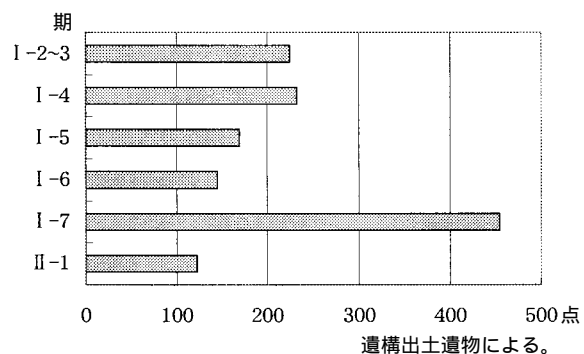
(1) 時期別土器点数

Tab.97から、まず時期毎の土器点数についてTab.98を得た。今次調査と船戸遺跡の比較より抽出できる点として、まず船戸遺跡では -2~

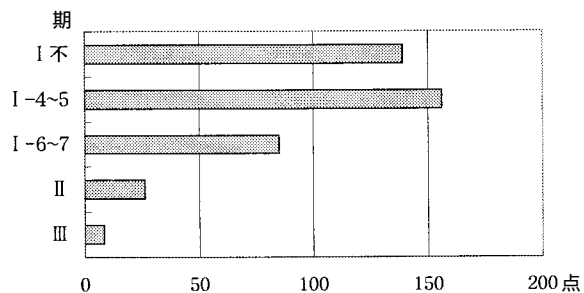
3期に比定できるものが一定量存在することが挙げられる。また、 期から 期においても差異があり、船戸遺跡で一定数が出土しているのに対して、今次では急激な減少がみられる。これに関連して問題となるのは底部が下方あるいはやや外方へ踏ん張るように突出し、ヘラで切り離される平底の土師質土器杯で、船戸遺跡では一定数が出土しているが、今次は1351や1595が該当する可能性を持つのみである。このタイプは高知平野での良好かつまとまった出土例がなく、同平野とは異なる地域色として捉えられる。したがって明確な編年の位置付けができない状態にあるが、形態や瀬戸内地域の資料との比較から考えて、

期の中頃から後半を中心とする時期に属するものと推定でき、Tab.97及びそれに基づく各図表では「 期 ~ -1期」に含めた。本節ではこの器形を杯D2と仮称する。今次出土遺物中に同類が僅少或いは皆無であることは、遺跡の消長を示すものと考えられる。

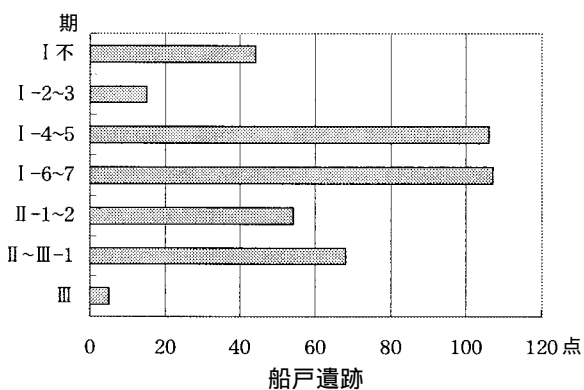
なお、Tab.98下ノ坪遺跡H区は遺構出土遺物による資料であるが、同調査区は遺構からみても 期末に盛行している。また同遺跡は、少なくとも 期まで、少量ながら遺物が出土している。



下ノ坪遺跡H区



具同中山遺跡群(今次調査)



全てTab.97より作成、その他註7。

Tab.98 時期別遺物点数

(2)土師器と須恵器、土師質土器

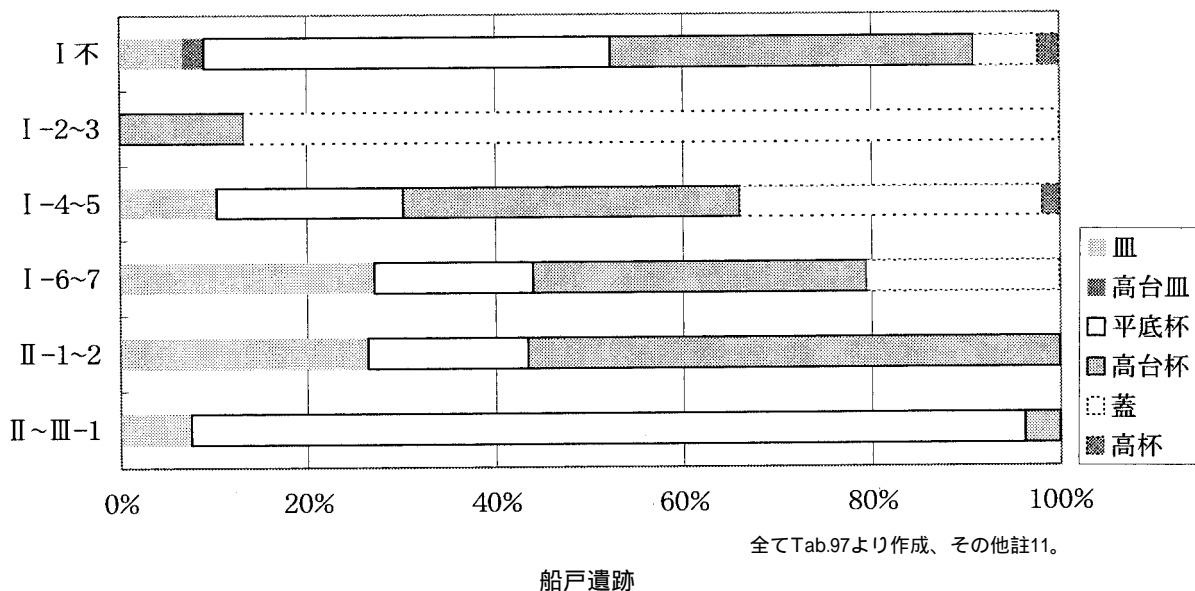
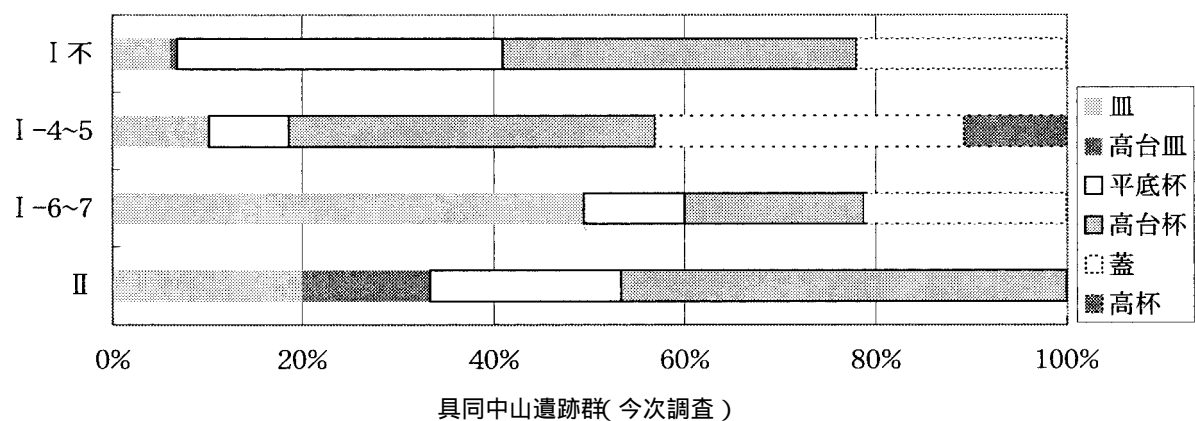
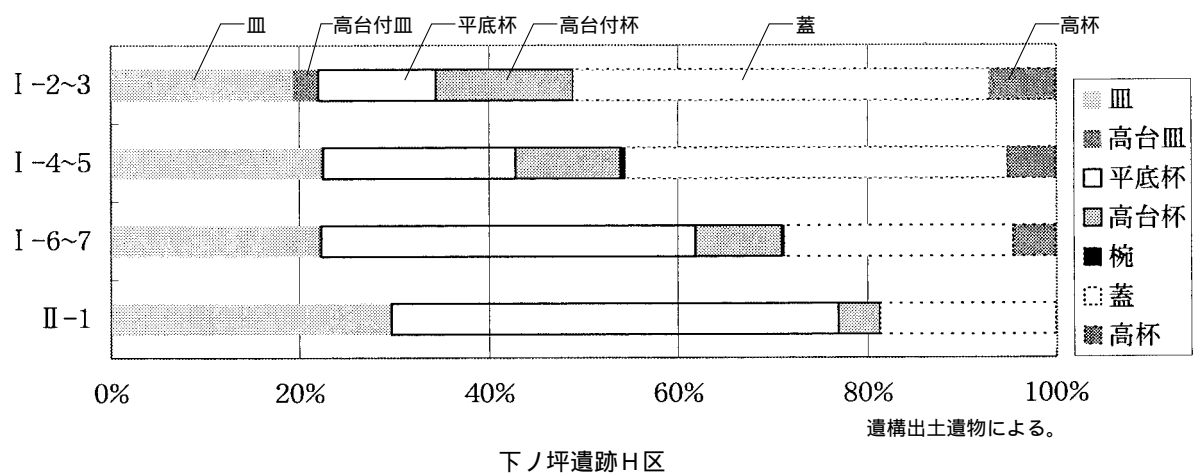
土師器、土師質土器などの呼称については、以下註3に準ずる。

まず明らかな事項は、須恵器の消長である。註2と3で、 期に至って食膳具が速やかに酸化焰焼成化することが指摘されたが、Tab.97より土佐西南部においても同様の軌跡をたどったものとみられる。次に 期における土師器の比率をみれば、Tab.97にあげた下ノ坪遺跡に比して、今次調査および船戸遺跡(以下両遺跡)では極めて低いことを指摘できる。註2と3では、土佐中央部において -4期以降の土師器の全てに回転台が使用されていることや、律令期の土師器が須恵器生産を基盤としていることが推察できたが、両遺跡でも回転台の使用を想定させるものは存在するが否定できるものは存在せず、この地域においても同様の理解をしておくことができる。さらに、両遺跡で確認できた土師器自体の僅少さは、現在のところ土佐西南部に共通する現象となっており、下ノ坪遺跡以外でも土師器の各器種が一定量出土している高知平野東部との間に相違が看取できる。それが肯定されるならば、各々の地域における 期の土師器の生産と使用に関して特性が指摘でき、土器生産とその背景について言及することができる。土佐西南部をはじめとする各地域で調査例が増えれば、より明瞭な言及が可能となる。

次に、 期の土師質土器について検討する。両遺跡において 期から -1期頃に比定できる土師質土器の発色は斉一的で、灰白色あるいは淡褐灰色の白っぽい色調で、焼成不良の須恵器との区別が困難である。後続するとみられる土器や高知平野との比較によって土師質土器とした。今次では1350の他、未報告遺物の9点がこれに該当する焼成と器形を呈するが、船戸遺跡の該当器種はほとんどがこの焼成・色調を呈する。高知平野東部における 期末から 期の変化の一つとして、酸化焰焼成の食膳具の色調の変化が挙げられることは註2で触れられており、焼成においてもなんらかの変化があったものと考えられる。しかし、発色の変化は、同地域では必ずしも急激かつ斉一的なものではなかった。今次調査及び船戸遺跡では、 期に至って須恵器とはいえないが 期の土師器とも異なる焼成と色調への変化が明確に看取でき、また高知平野東部に比してその色調は画一的で、 期の土師器との差異も比較的明瞭である。以上のような色調の特徴は焼成法に起因するものとみられ、土器生産体制の特質とその変化に関連して、今後の資料の蓄積を待って検討すべき課題の一つと言えよう。なお、船戸遺跡で先述の杯D2に該当しない -1～2期の土師質土器と杯D2の胎土及び色調を比較すると、双方とも上記の白っぽい色調は共通であり、胎土については杯D2の方に砂粒のやや少ないものが多い。また 期から 期への転換に関しては、この後にも適宜触れる。

(3)器形組成とその変化

Tab.97からTab.99を得た。資料がそろっている -4から 期を中心に考える。3遺跡からまず共通して読み取れることは蓋と高杯の消長であり、前者は 期前半から 期初めにかけて漸減し、後者も 期に続かない器形である。即ちこれら自体が律令的な背景を持った器形であり、蓋については 期の中でも漸減するといった見方が可能である。次に杯形式をみると、下ノ坪遺跡では -5期以降杯Aが杯Bを凌駕している⁽¹²⁾。それに対し今次調査と船戸遺跡では、Tab.99の如く 期後半も杯Bの多い状態が続く。換言すると、下ノ坪遺跡では杯Aが漸増するのと対照的に杯Bは蓋と共に漸減するが、今次調査と船戸遺跡では杯A、杯Bともに 期においては明確な組成上の変化をみせ



Tab.99 時期別器形組成

ず、Ⅲ期には一時高台付き杯が増大する。このような認識はTab.99の「不」分を考慮しても変更の必要がなからう。⁽¹³⁾ 風指遺跡でも、形態などからⅢ-5～Ⅲ-7期を中心とする時期に比定できる須恵器杯があるが、報告の包含層出土分のうち杯Aが15点、杯Bが22点認められる。⁽¹⁴⁾ なお、杯Bの時期比定には高台の形態その他を手掛かりとしている。⁽¹⁵⁾

以上の結果を大局的にみれば、Tab.99の3遺跡における器形組成の間には一部を除いて同軌性を看取でき、土佐中央部以西の古代前期中頃から後期初めの器形組成およびその変遷のモデルを推測することができる。そしてその中で、Ⅲ期後半の杯形式内での組成比などに地域差がみられる結果となった。なお今次調査のⅢ-4～Ⅲ-5期は、土師器や高杯が、低比率ではあるが中筋川下流域の他遺跡に比べれば一定揃っていることが、Tab.97や風指遺跡、具同中山遺跡群'89・90年度調査区との比較などから窺える。また船戸遺跡では長頸壺をはじめとする壺の多さを指摘できる。

(4) 須恵器皿の口縁部形態

主に須恵器平底皿の口縁部形態について、時期や地域による傾向が窺える。形態の分類については註2に依拠することとする。ここで注目する、口縁端部内面に凹線を表現する形態はb形態と呼称する。まず下ノ坪遺跡H区で様相をみるため、報告書掲載の遺物を対象としてTab.100-1を得た。⁽¹⁶⁾ 同表を含め以下に記す点数は、口縁部を確認できるものを対象としたものである。Tab.100-1より、

Ⅲ-4期には皿において口縁部b形態が主流化しているが、後続のⅢ-5期以降には非主流に転じることが看取できる。杯については表の時期を通じて確実なものが1点(SK20)、可能性のあるものが2点挙げられるのみであり、例外といえる。以上のようなb形態のあり方は、白猪田遺跡や小籠遺跡および土佐山田町須江古窯跡群をみても齟齬はなく、高知平野東部の傾向とみておくことができる。⁽¹⁷⁾ 口縁端部内面を凹状に作出する手法は、Ⅲ-4期では端部を上方或いはやや内側に明確にひき出し、端部下で一度外反させること等とあわせて、明確に屈曲した形状を意識する。しかし、今次調査や船戸遺跡、あるいは土佐山田町須江古窯跡群の一部では、端部を若干巻き込むのみのもの、突出が弱いもの、弱い凹線状に表現されるもの、端部下の外反がみられないもの等がある。それらは傾斜が強く低い体部に伴う場合が多く、Ⅲ-5ないしⅢ-6期以降に多い属性を表しているものと解釈できる。Tab.100-2、Tab.100-3は、今次調査と船戸遺跡について、そのように形態などから時期比定したTab.97中の須恵器皿におけるb形態の比率であるが、Ⅲ-4期のみならずⅢ-5～Ⅲ-7期相当のものでも同形態が過半を占めていることが注意される。杯についても、船戸遺跡では55点のうち5点を確認することができる。風指遺跡の報告では、包含層出土の須恵器皿29点中27点、同杯28点中1点がb形態である。以上のように高知平野東部と中筋川下流域では、消費地遺跡における須恵器皿の口縁部b形態の展開と継承のしかたが異なっている可能性がある。なお今次調査及び船戸遺跡においても、Ⅲ期では高知平野東部と同様に口縁部b形態がほとんど継承されないということは、他の形態的属性や法量分化とともに、Ⅲ期の皿が新しい背景をもって成立していることの傍証と考えられる。このことは註2と3で述べられた諸要素とともに、Ⅲ期への画期を示す事象に加えられるものと考えられる。

さて、須恵器皿の口縁部形態について近隣の例をみると、b形態のものがまとまっている例として、まず枝朶下池4号窯址、悪社谷2号窯址、枝朶下池2号窯址、枝朶下池5号窯址といった松山平野周縁の窯跡があげられる。⁽¹⁸⁾これらの窯跡では、報告をみる限りb形態が主流であり、またその形態と調整や、一緒に報告されている遺物を土佐の編年観でみれば、いずれも -4～5期以降に相当する属性を有している。伊予ではその他、口縁部b形態の須恵器皿が出土している消費地遺跡もあるが、報告の限りでは同形態が客体である例が存在するのに対して、その逆の例は管見に入っていない。例えば西条地域の池の内遺跡では、皿を含む須恵器がまとまって出土しているが、口縁部b形態の平底の皿は報告中に存在しない。次に讃岐では、8世紀前半に位置付けられている森広遺跡SD7801でb形態の優越が看取できる。⁽¹⁹⁾また十瓶山窯跡群の北条池1号窯跡、庄屋原2号窯跡でも同様の口縁部形態の皿が複数採取されており、主流となっている可能性もある。両窯跡は8世紀中頃から後半に位置付けられている。⁽²⁰⁾その他、郡家一里屋遺跡 区SD13、同 区SR02、同包含層、同 区西部SR02、川津一ノ又遺跡SD11で散発的な出土例はあるが、それらも含めて、8世紀後半から9世紀後半の中で捉えられているその他多くの消費地資料において、口縁部b形態が優越する傾向はみられず、むしろ客体である例が多い。⁽²¹⁾阿波でも、管見ではそのような傾向は指摘できない。⁽²²⁾

上記のような知見をまとめると、讃岐、伊予、土佐における須恵器皿での口縁部b形態の採用は、奈良期前半から平安初期にかけて一応その例をあげることができる。土佐では8世紀中頃ないし後葉に一旦同口縁部形態が主流化し、高知平野東部では、このことに符合する例が窯跡と消費地遺跡の双方に存在する。⁽²⁴⁾また土佐西南部の諸消費地遺跡では、同形態の普遍化が平安初期まで継続しているとみられる点に特徴を認められる。⁽²⁵⁾b形態の作出手法については、いくつかのバリエーションがあるものの、やはり回転台不使用の土師器とは異なる須恵器的な手法のものが多く、その変化も、時期と共に回転台使用に適した方法で簡略化する点では共通しているようである。⁽²⁶⁾口縁部b形態が土師器の影響を受けたものであることを踏まえて、以上のような諸事象について考えれば、まず、同形態の盛行が持続的である土佐西南部において、期の土師器食膳具の出土比率が極めて低く、食膳具生産における須恵器の偏重がより強かったとみられることが注意される。これに対し、同形態が -5期頃以降鎮静化する高知平野東部では、回転台使用ではあるが須恵器にはない属性を有す土師器が 期において一定普及していることが対照的で、土製食膳具の需要と生産における地

期	%	b形態 点数	全皿 点数	該当遺構
I -2~3	0	0	2	SB9,SK16
I -4	75	6	8	SB17,SK22
I -5	12	2	17	SB18,SK30
I -6	10	1	10	SK27,33,SD40
I -7	25	4	16	SB20,21,22, SK21,34

Tab.100-1 下ノ坪遺跡H区

期	%	b形態 点数	全皿 点数
I 不	100	3	3
I -4~5	82	9	11
I -6~7	62	24	39

Tab.100-2 具同中山遺跡群(今次調査)

期	%	b形態 点数	全皿 点数
I 不	100	3	3
I -2~3	-	0	0
I -4~5	78	7	9
I -6~7	55	16	29

Tab.100-3 船戸遺跡

Tab.100 須恵器皿口縁部におけるb形態の比率

域差が表れている可能性がある。口縁部b形態の採用と展開も、このような問題と関連している可能性がある。次に、以上のような諸問題に関わる当面の課題を列挙すれば、まず土佐西南部では下記の神ヶ谷窯跡に関わる問題点があげられる。十瓶山窯跡群に関しては、b形態の製品がどのように消費されているのか、或いはいないのか、またその事と各窯との関係の解明が期待される。伊予については、器形組成や変遷を知ることのできる良好な消費地資料の蓄積を待つべきであろう。このような課題が解明されれば、「回転台土師器」や赤色塗彩土師器を巡る問題と併せて、地方における当該期の土器生産を理解する為の視点となろう。

(5)神ヶ谷窯跡について

上では中筋川下流域の3遺跡と、その理解に有効な遺跡について述べてきた。ここで扱う神ヶ谷窯跡は、3遺跡より約10km上流の中筋川沿いで、同じ幡多郡内の隣郷に属する。同郡で発掘調査が行われた窯跡は、本窯跡と鹿々場窯跡のみである。出土遺物の時期は -5期を中心とする時期に比定できる。報告の組成比率では杯Aが37%、杯Bが17%を占める。また皿の口縁部b形態については、報告書掲載の口縁部を残す皿の総数49点中で8点を数えた⁽²⁷⁾。このような数値は、既述したような同流域の消費地遺跡での傾向に矛盾するものである。現状でこれを解釈するには2つの方向性が考えられ、第1は窯跡という遺跡の性格に起因するとみる方向である。この見方は、何らかの理由で消費地の器形組成や形態属性の量的な傾向が反映されなかったという方向へ展開する。工人集団の問題へと繋がっている可能性もある。第2は当窯跡の遺物群から、未知の消費地の様相を想定する方向である。そしてこれら2つの因子が関連あるいは複合している場合も考えられる。第1の方向で展開する術を持たないので、以下、第2の方向で仮定を重ねて展望を述べてみる。この場合、問題にしている杯皿の形態や組成に関して、神ヶ谷窯跡の生産が、既述したような中筋川下流域の遺跡群とは異なる傾向の需要に対応しているということであり、その要因として小地域色、或いは遺跡の性格差の2通りが考えられる。仮に後者の場合は、既述の3遺跡が出土遺物などからいずれも水運至便な拠点の遺跡である可能性が高いので、それと異なる遺跡を想定してみる必要があろう。しかし、現状ではこのような可能性を検証するための資料が揃っていない。

ところで、神ヶ谷窯跡と既述の3遺跡の須恵器について指摘しておきたい点がある。神ヶ谷窯跡の須恵器にみられる特徴の一つとして、ほとんどの杯皿の内面にみられる、粗い条痕を残す特徴的なナデ痕跡があげられる。外面の立上りや底部の仕上げも、丁寧さに欠けるものが多い。蓋においても天井部外面のヘラ切り痕跡の著しいものが存在する。このような須恵器は今次調査、船戸、風指の各遺跡にも存在するが、あくまでも少数である。例えば船戸遺跡SR1、SR2及び 区包含層で報告されている須恵器杯皿で内底を観察できる82点のうち、上記の特徴的な内面のナデ痕を認めるものは11点で、底部や立上りおよび蓋の天井部も、神ヶ谷窯跡出土品のように粗いヘラ切り痕や段差を認めるものはごく少ない。このような違いは、形態などの諸属性とあわせて見た場合、時期の違いとして全てを説明することが難しい。既述の皿口縁部の問題とあわせて、工人集団や供給対象などの問題と関連している可能性が考えられる。またこのようにみれば、上記の各消費地遺跡には複数の生産単位からの須恵器の供給が想定できる。なお、高知平野東部で簡略化が進む -5~7期の須恵器と、プロポーションなどからみて時期的に近いと思われる船戸遺跡の須恵器を比較した場

合、後者の方に底部などの調整が丁寧なものが多い。

(6)特徴的な杯蓋

同郡内ながら隔たった神ヶ谷窯跡と鹿々場窯跡では、蓋「⁽²⁸⁾類」が存在し、「郡単位での須恵器生産」が想定されている。同類は高知平野東部で見かけない特徴的な形態であり、今次では1661が該当する他、具同中山遺跡群の先次調査でも関連すると考えられるものが複数出土しており、当該地域に一定普及した特色として認識することができる。

(7)爪形状圧痕

神ヶ谷窯跡では、「ほとんど全ての杯Bの底部外面に爪形状圧痕が認められる」ことが報告されている。圧痕は國下多美樹氏の分類ではE類に属するものがほとんどで、僅かにRやHs、Nd類の可能性を持つものが認められる。⁽³⁰⁾放射状の痕跡は認められない。爪形状圧痕を高台貼付時の痕跡が切るものは存在するが、その逆は認められないことは國下氏の観察とも一致する。以下 期の須恵器を対象に述べる。既述の3遺跡で爪形状圧痕を検討すると、杯Bにおいて今次調査で86点中8点、船戸遺跡で89点中5点、風指遺跡の報告掲載分21点中6点を認めることができた。⁽³¹⁾杯B以外で確認したものはない。圧痕の諸属性および状態は神ヶ谷窯跡に準ずるものである。時期的には -5期から -7期にまで比定できるものが各々存在する。高知平野においては、爪形状圧痕は 期前半に位置付けられる福井遺跡で報告されているのみであり、上記のような様相は、まず中筋川流域の特色として把握できる。そして神ヶ谷窯跡では、杯Bにおいて爪形状圧痕を残す技法が貫徹しており、上記の3消費地遺跡には同圧痕を残す製品が少数入っていることになる。ただし、それらの中で神ヶ谷窯跡の製品らしきものは積極的に指摘できず、調整や形態などからみれば、むしろ異なっているものが多い。なお、同圧痕についてはその性質上、圧痕形成後の調整や高台貼付などによって消された可能性を否定できない資料も少なくなく、定量的な扱いには注意が必要であることを付記しておく。

(8)食膳具小結

a) まとめと留意点

中筋川流域の諸遺跡および関連する遺跡出土の食膳具から指摘できる事柄を述べてきた。資料の性格により断片的な記述となったが、それらをまとめて何らかの展望を得ることもできる。まず中筋川流域では律令期の土師器が僅少であった。その他の高知平野との比較や、消費地遺跡と神ヶ谷窯跡の関係について、 期後半に関して模式化したのがTab.101である。当地域の須恵器生産に関して、口縁部b形態の堅持や一部の特徴的な手法にあらわれているような共通性を窺うことができる。久家分類の蓋 類或いはその類品は、現段階では少量ながら幡多郡域での展開を捉えられた。そして神ヶ谷窯跡と他の遺跡の比較からは、工人集団や地域差、或いは遺跡の性格を視野に入れた土器生産の一端を示唆している可能性を考えた。中筋川下流沿いの遺跡では、 -5 ~ -7期の杯の組成が高知平野と逆で杯Bが優位であり、神ヶ谷窯跡出土須恵器にはそれらの遺跡と異なる様相もみられた。以上の推察において、その根拠とした資料には一括性に欠けるなどの限界があり、将来の良好な資料の蓄積によって是正される点もあろう。

	高知平野東部	中筋川流域	
	消費地遺跡	消費地遺跡	神ヶ谷窯跡
杯組成	平底主体	有高台主体	平底主体
須恵器皿の口縁部b形態	非主流	主流	非主流
丁寧さ	-	丁寧なものの存在	粗雑
粗いナデ	-	少数存在	主流
爪形状圧痕	例外	少数存在	ほとんど全て
蓋皿類	不在	若干数存在	少数存在

※Ⅰ-5~7期を対象とする。

Tab.101 各地域・遺跡の傾向模式表

b) 中筋川下流域の遺跡群の動向

中筋川下流域の遺跡について、食膳具からみた消長をまとめる。時期区分は如上に準ずる。

期 奈良時代及び平安初期に該当する。 -2~3期に比定可能な遺物は今次調査では極僅少で、船戸遺跡や風指遺跡に存在した。しかし、 -4期以降に比定できる須恵器が増加する点は、3遺跡ともに同様である。具同中山遺跡群⁽³²⁾89・90年度調査区でも、一応同期以降の土器が確認できるが、期以降に比べれば少量である。高知平野では全般に、 -4期以降に安定的な土器様相がみられるとともに、土器の出土量も増加することが指摘されている。⁽³³⁾また最近の調査で、今次調査区の南方の川沿いでも 期相当の遺物が出土している。⁽³⁴⁾

期 今次調査区では遺物量が急減し、本期後半以降は僅少となる。次の繁栄は 期を待たねばならない。これに対して風指遺跡と船戸遺跡では、緑釉陶器や篠窯産鉢に加えて既述の土師質土器杯D2が多数出土しており、継続的な活動が確認できる。

-2~3期 期はほぼ平安時代後半に該当すると考えられる。土佐西南部では -1期相当の資料が抽出できていない。さて本期相当の遺物は、風指遺跡と船戸遺跡でも例外或いは僅少となる。対して具同中山遺跡群89・90年度調査区では、土器碗に加え土師質土器小皿と杯も、形態や法量からみて本期に比定可能なものが多数出土しており、アゾノ遺跡でも本期相当の土器碗などが出土しはじめる。これらは次期の活況への胎動であり、先行した地点を示している。

期 流通の変化を背景とする画期である。具同中山遺跡群の89・90年度調査区とアゾノ遺跡に加え、一旦低調であった今次調査区と船戸遺跡でも貿易陶磁器や畿内産瓦器、東播系須恵器などが多量に出土し、活況を呈す。東海地方の製品もみられ、今次も出土している。このような搬入品の量と内容、および遺跡の拡がり、これら各遺跡の先行期は勿論、同時期の土佐の他地域と比較しても特異であり、当時の広域流通をめぐる状況下で四万十川下流域及び中筋川流域が有した意味や、権門との関係が注意される。⁽³⁵⁾

・ 煮炊具

四国における当該期の煮炊具の様相については、不明瞭な点が多い。土佐については、古代初期頃の様相は食膳具同様ほとんど把握することができない。8世紀中頃以降については一定の出土例があり、後述するように、物部川下流域では時期比定の指標となる資料も存在する。今次調査では当該期に属するとみられる甕型の煮炊具(以下土師器甕)が、既述のような食膳具とともに一定量出土しているため、その分類と位置付けを試みる。対象とする資料は、今次調査では 層・ 層を中心とする全出土遺物、船戸遺跡ではSR1、SR2、SR3及び包含層出土遺物の未報告分や細片も含めた全てである。下ノ坪遺跡や土佐国衙跡については、報告された遺物を対象とする。全体が復元できる個体の僅少さから、まず口縁部形態と胎土からみていくこととする。因みに胴部については、Fig.216、217や御産所権現山遺跡資料⁽³⁶⁾から、9世紀前半以前では総じて張りのない非球形で、外面に粗いハケを施すものが中心になるとみてよい。

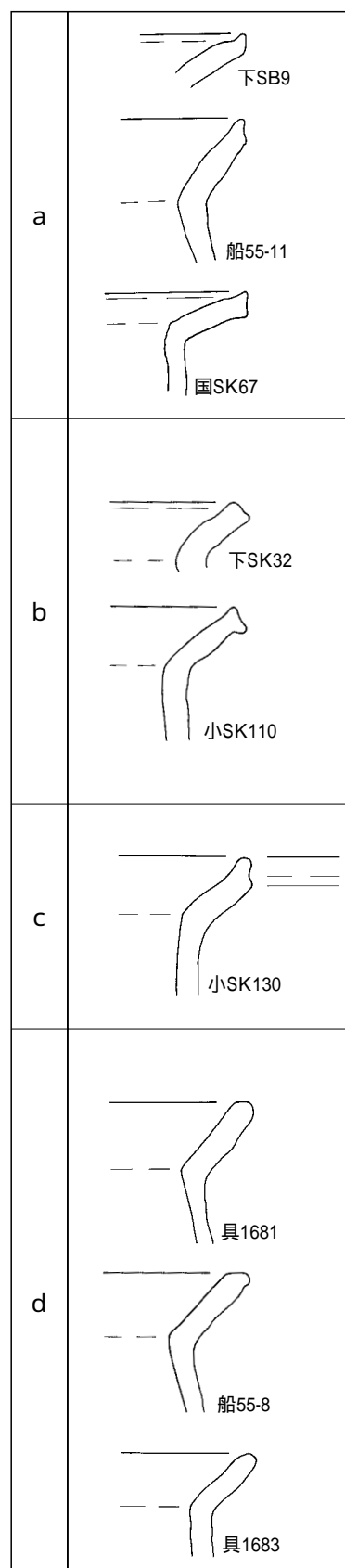
1. 口縁部の形態

a形態 外反して外端面は垂直となる。端面の下側の角を意識的につくったり、上端部がやや尖るものがある。bやc形態に似るものもあるが、各形態と胎土について後述のような連繋傾向が看取できることから、区分が必要と考えた。現状では、胴部との関係について不明瞭な点も多い。

b形態 基本的に断面方形の端部を持つ。a形態に似るものについては、端面が斜面になることなどを指標とした。端面が横ナデによりやや凹状をなすもの、若干拡張されるもの、やや摘み上げられるものなど、バリエーションがある。口縁部外面で2段程度のヨコナデが確認できるものも多い。

c形態 外反して端部は摘み上げられ、断面三角形に尖る。口縁部外面で2～3段のヨコナデが確認できるものも多い。特徴的な形態で、胎土との関連も相俟って判別の容易なものが多いが、図上ではaやb形態との中間的なものも若干存在する。他形態との区別については後にも述べるが、b形態の上端部角を摘み出したような、外端面の明瞭な凹みを本形態の指標とした。

d形態 やや内湾しながら外反する。端部断面の角は丸みを持ちながらも、一応端面を意識したものが多い。端面がやや凹になるもの、若干肥厚するもの、丸くおさめるものなどもある。



下 = 下ノ坪、国 = 土佐国衙、小 = 小龍、船 = 船戸、具 = 今次調査

Fig.215 土師器甕の口縁部形態例

しかし、上記の各形態との区別に迷うものはほとんど存在しない。

2. 胎土

以下では特徴的な 群及び 群を軸として設定した胎土群について述べる。もちろん全ての胎土がこれらの群で分類できるわけではない。

群 チャートの砂粒や砂岩、泥岩の円粒を含む。胎土ベースは密であるが、弥生・古墳時代の在地土器の延長で理解できる含有鉱物と焼成である。色調はにぶい黄橙色を中心とする。下ノ坪遺跡SX2では移動式カマド(以下カマド)も出土しているが、本群では普遍的にみるものではない。

群 0.5～2.5mm前後の石英単独の角粒を多含する。長石等も含む。雲母や角閃石は含まない。断面は粗く、細かい層状に見えるが硬質の焼成で、 群のような在地の伝統的な胎土及び器壁とは一線を画す。色調の傾向は橙色ないし黄橙色である。含有鉱物、焼成ともに特徴的なものを一定普遍的に認めるが、他の胎土群に似るものもないわけではない。下ノ坪遺跡SB9などではカマドも出土している。

群 大小の角粒を多く含んで在地的な土器と一線を画す点は 群に通ずるが、花崗岩に由来するとみられる大礫を特に多く含む特徴がある。⁽³⁷⁾ 礫は大きいものでは7mm前後に及び、長石を基本に、石英を同一礫内に含む点が特徴的である。雲母はほとんど含まない。土佐出土のものは、小気孔がみられ硬度も 群に劣るものが多い為か、砂粒が剥離しやすい。にぶい黄橙色を中心とする明るめの色調である。このような諸特徴は、土佐及び後述の伊予出土のものについては、画一性が極めて強い。土佐ではカマドの出土例がない。

群 群に準じ、雲母片を多く含む点のみが異なる。Tab.102及び後述のように出土点数は少ないが、現在確認しているものはいずれも堅緻な胎土である。カマドの出土例はない。

群 含有鉱物の種類では 群と差異化できないが、 群で特徴的である大粒が少なく、砂粒自体も同群に較べて少ないものを本群とした。土佐では西南部で少数が認められるが、讃岐や伊予で普遍的に認められる胎土に近く、現状ではそれらとの判別がつかない。

以上、胎土について記した。要するに 群、 群、 群は、在地的な酸化焰焼成の土器において非普遍的な胎土で、特に 、 群は他地域の産である可能性が高い。さて、胎土について肉眼観察から判断できることは限られており、慎重に扱うべきであることは言うまでもない。上記の 群、

群、 群も、突き詰めれば同質の鉱物からなる砂粒を含んでいることになる。しかし、明らかに特徴的な胎土群が存在し、形態との間に関連が看取できるものがあることも事実であり、それを踏まえることには意味があろうと考えた。

3. 口縁部形態と胎土の関係

上記の口縁部形態と胎土群についてTab.102を得た。これらより、まずd形態と 、 群の間に強い連繋が看取できる。b、c各形態は、 群を中心としながらも複数の胎土が存在する。 群は、a形態とは連繋しない。このような関係は、中筋川下流域と高知平野東部の出土遺物に共通していることも認識できる。

4. 型式と編年観

上では、口縁部形態と胎土の関係についてみてきた。全体が復元できる資料が少ないが、Fig.216に挙げた例などから、胴部についても推測することができる。胴部が張らず、非球形で最大径が口縁部にある全体形や、外面の粗目のハケ調整が各口縁部形態および胎土にかかわらず原則となっているが、内面調整やハケの施し方に若干の差異も看取でき、上記の口縁部形態や胎土と関連を持っている。またこのような形態や調整とは異なり、比較的球状でタタキ痕を残し、しばしば頸部に横方向のハケ調整を施すものも存在する。以下ではこれらについて説明し、型式を設定する。

土師器甕A 復元率の良い例としてFig.216などを挙げられる。口縁部形態は既述のa、b、cが存在する。体部は総じて張りを持たず、最大径は口縁部にある。丸底である。ハケは粗目で、底部以外の体部外面は揃った縦方向、底部は多方向、口縁部内面は横方向のハケ目が、最終調整痕として残る。体部内面にもハケ目を残すものもある。胎土は 群、 群、その他が存在する。法量は2種以上が認められる。製作工程についても伺える資料が少数ながら存在し、例示したFig.216の外面は、ハケ目の下から一部タタキ痕がのぞく。西鴨地遺跡では口縁部まで連続するハケ調整痕が観察できる例があり、同調整が口縁部の折り曲げに先行することを示すが、口縁部外面で横ナデ以前のくい込んだハケ先端部痕が残る例には検討の余地もあろう。今次本類に分類したものは、以下の他型式との比較において、その細部形態や胎土が多様で、今後検討の余地も多いであろう。以下、本類は適宜甕Aと略称する。

土師器甕B Fig.217参照。口縁部はd形態である。全体形は、肩の張らない非球形で口縁部に最大径があるという点では、土師器甕Aと共通する。粗目のハケ痕を残す点も同甕Aに類似するが、体部内面には少なくともハケやケズリの痕跡を残さず、そのような調整が行われていない可能性がある。口縁部内面には横ハケ痕を残すものがあるが、甕Aでは同痕がほぼそのまま残されるものが少なくないのに対して、本類はある程度消されることを原則とする。外面のハケは体部上位が斜位になる点が特徴的で、ハケ原体は甕Aに増して粗目の傾向がある。胎土は 及び '群'に限られる。法量は2種以上が存在する。なお、御産所権現山遺跡⁽³⁹⁾出土資料をみると、体部外面中位以下の調整痕は大略甕Aと同様であることがわかる。以下適宜甕Bと略称する。

胎土 形態	I	II	III	IV	不	計
a				1	2	3
b	7	3	1	2	4	17
c		2		2	1	5
d			35			35
計	7	5	36	5	7	60

具同中山遺跡群(今次調査)

胎土 形態	I	II	III	IV	不	計
a	1	1			1	4
b	1	4			1	6
c	1	17				18
d			18	2	1	21
不	1				2	3
計	4	22	18	2	3	52

船戸遺跡

胎土 形態	I	II	III	IV	不	計
a	7					7
b	3	7			4	14
c	1	1			1	3
d			1	3		4
不	1					1
計	12	8	1	3	5	29

下ノ坪遺跡H区

胎土 形態	I	II	III	不	不明	計
a	1				1	2
b		1			3	4
c	1	1				2
d			5		1	6
不				1	2	3
計	2	2	5	1	7	17

土佐国衛跡

「不」は分類不可能、「不明」は未検討、数字は点数、註38参照。

Tab.102 土師器甕における口縁部形態と胎土

土師器甕C Fig.217参照。形態や調整が上記の2種とは大きく異なる。すなわち体部外面に縦ハケ痕がみられず、タタキ痕を残す部分がある。体部中位の境界より上位には、横方向に連続するハケを施すものが多い。内面は口縁部付近に横ハケが施され、下半には指頭圧痕が残るものがある。体部のプロポーションは、中位の境界以下は半球形を呈し、上位は直線的に口縁部に至る。同境界で屈曲するものがあり、大型のもの以外はこの境界部の胴径が口縁部径に近い。甕A、Bに比してやや短胴なものもある。胎土は 群に限られ、口縁部はa形態に近いものが多い。なお、本類は上記のような体部の属性が指標となることが、上記各類との抽出点数比較に影響すると思われる。以下適宜甕Cと略称する。

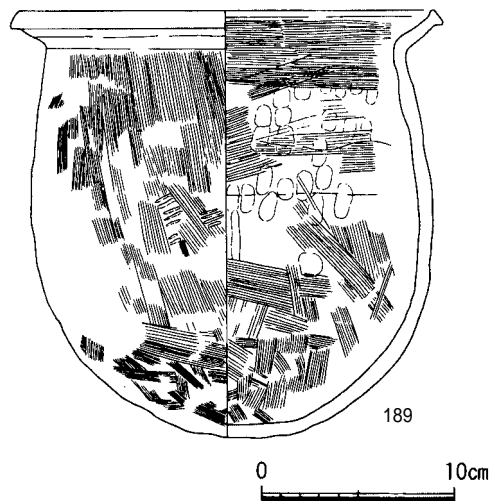
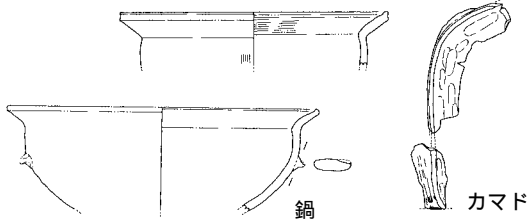
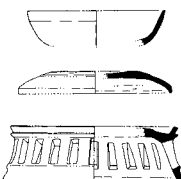

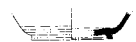


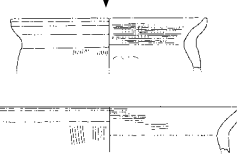




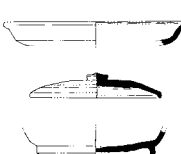
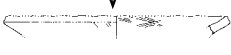
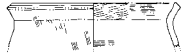

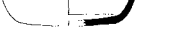


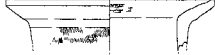


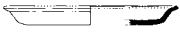
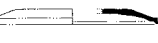
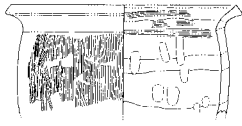






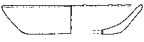


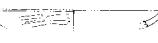


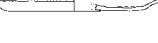


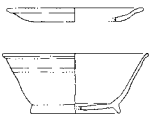
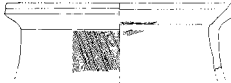


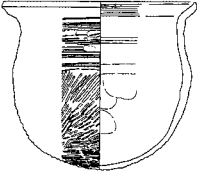

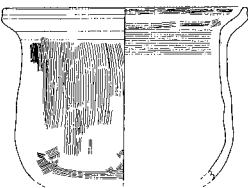
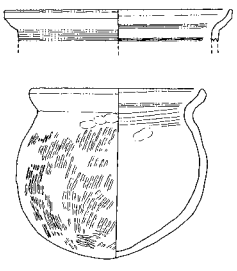
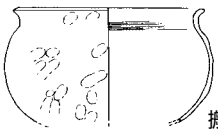
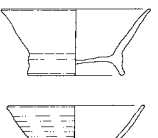

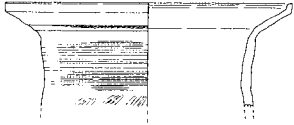


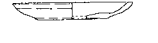


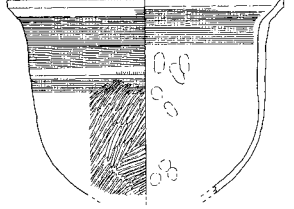

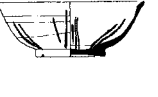

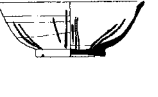
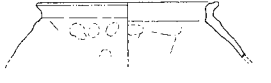


Fig.216 下ノ坪遺跡F区包含層出土土師器甕

土師器釜A いわゆる摂津C型に属するもので、土佐では⁽⁴⁰⁾ -1期を中心とする時期に普遍的に認められる。それ以前の釜の他型式は出土していない。 -1期では複数の一括性資料中で確認できるが、期後半に盛期を迎える遺跡では、包含層や流路から後記の甕A2と共に普遍的に出土することから、同期には出現している可能性がある。胎土は 群、 群、その他があり、 群は未確認である。体部外面に甕Aと同様の縦ハケを残す。西鴨地遺跡の流路出土遺物は、後記の甕A2と釜Aが同じ胎土と酷似したハケ目をもつ様相が顕著な例である。

以上のように分類を行ってきたが、これらの編年の詳細はいまだ明らかにできない。しかし、高知平野東部で提示されている食膳具の編年案をもとに、遺構出土資料による把握を試みたのがFig. 217である。まず -3期頃では、胎土 群などの甕Aと、甕B⁽⁴¹⁾ (胎土 群)が存在する。甕Bを確認できる下限は、 -5~6期の小型品である。 期の甕Aは細部形態や胎土においてバリエーションがあるが、口縁端部は -4期以前には顕著に拡張せず、 -5~7期にはやや拡張されるものがみられる。 -1期では口縁部c形態が出現する。このような口縁端部の変化を、甕Aにおける時期的な変化と捉える。口径が15cmに満たない小型のものについては資料が十分でないので今後は除外し、口径約17cm以上の甕Aについて、口縁部がb及びa形態を呈すものを甕A1型式、c形態のものを甕A2型式と称することとする。このようにみてくると、c形態とa、b形態の関係が問題となるが、隣県の様相も考慮すれば現状では明快に説明できない。しかし、土佐では原則的に、胎土 群では各種の口縁部形態が存在するが、 群はb、c形態であることは示唆となろう。当面は、口縁部a形態のものの全容がわかる例の蓄積や、胎土 群甕の生産地について知見を得ることが課題となる。なお、甕A2に関しては、胎土に大粒の礫を含み、硬質に焼成されたものが主体であるが、それらは口縁部の角度や細部形態、肩を持たない胴部、胎土や焼成の状態、ハケ痕跡などにおいて、先行期の煮炊具と比較して強い斉一性が看取できる。法量についても現状では画一的である。

期	遺跡・遺構	甕 A	甕 C	甕 B	小型器種、搬入品
3	下ノ坪 SX2				
	下ノ坪 SK18				
	下ノ坪 SK16				
	土佐国衛 SK113	(胎土群) ↓ 			
	下ノ坪 SK22	(胎土群) ↓ 			
	下ノ坪 SK28	 		 	 
	白猪田 SD1				
	下ノ坪 SB17			 	
	下ノ坪 SK30			 	 
	下ノ坪 SB18				
7	小籠 SK110				
	下ノ坪 SB21				  搬
1	下ノ坪 SA4				 
	下ノ坪 P14		(甕C) 		
	土佐国衛 SA13				
	白猪田 P30	(胎土群) ↑ 			
	小籠 SK130 SK136	(胎土群) ↓ 		 搬	 
	土佐国衛 SK63			 	 
	ひびのき サウジ SE1	 釜A		 	   搬

本図の編年観は煮炊具の型式から作成したものではなく、註2、3の食膳具の編年に依拠したものである。「搬」は搬入品。出典は報告書一覧参照。

Fig217 古代における煮炊具の変遷

甕CはⅠ期に出現し、Ⅱ期初めに釜Aと共存した後消滅する。上記の甕A2と併せて、Ⅱ期への画期が煮炊具についても想定できる。畿内においては藤原京期以来、都城を中心に球胴の甕が主流化することが知られるが、土佐では甕Cより前には球胴状のものは例外である。下位にタタキを残す球胴の甕は、都城や太宰府、その他の地域でも平安前期に普及しており、当該地域一帯に普遍的な様相であることは首肯できる。しかし、土佐のものも含めて細部での差異が多く、様々な地域色が存在するようである。

5. 各遺跡での出土状況

Tab.102では、まず今次調査における甕B(胎土、口縁d形態)の高比率と、下ノ坪遺跡における甕Bに対する甕A1(口縁a、b形態)の優越、船戸遺跡における胎土群の甕A2(口縁c形態)の高比率が注目される。上記の変遷観からみると、各型式の多寡は遺跡の盛期の違いを反映している面があるものと考えられ、今次調査と下ノ坪遺跡ではⅡ期に属する型式が相対的に高率となっている。今次調査と船戸遺跡の比較では、甕A2の比率などから後者に時期の下る煮炊具が多いことがわかる。このような解釈は、既述の食膳具の分析結果とも整合する。これらから煮炊具について概観すると、Ⅱ期においては中筋川下流域では甕B、高知平野東部の複数の遺跡では甕Aが各々主流であり、他のタイプがそれを補完していることが認識できる。Ⅲ期になると、土佐中央部では甕A2が顕在化し、西南部の船戸遺跡でも同じ様相を呈するようになることが推測できる。また、資料が高知平野東部に偏っていた甕Cも、今次調査での1349、1896が該当し、いずれも胎土群に属す。

6. 他地域での状況

まず甕Bについては、伊予や讃岐など、瀬戸内海沿岸地域で出土例がある。特に幸の木遺跡ではまとまった点数が出土しており、胎土も土佐の群と区別できない。同類は、「企救型甕」と呼ばれているものと形態や調整が共通しており、その分布圏を一定把握することができる。甕A1の類品は、四国全域と東部瀬戸内沿岸で分布が認められるが、細部形態や胎土は多様なあり方をしているようである。土佐ではⅡ期に出現する甕A2は、甕A1類品とほぼ同地域での分布が認められる。甕A2には、形態等での均一性の強さが指摘でき、そのようなあり方や調整における属性も含めて、先行期の煮炊具よりも、甕A2にやや遅れて展開してくる摂津型の羽釜との共通性が看取できる。このような事象は、古代後期への転換に関わる可能性がある。

最後になったが、次の方々には小稿に関して懇切なご助言、ご協力を賜った。深く謝意を表します。片桐孝浩、久家隆芳、栗田正芳、佐藤浩司、佐藤竜馬、柴田昌児、筒井三菜、松田直則、松村信博、山本純代(敬称略)。

註

註1) 詳細は報告と、池澤俊幸「土佐における古代前期の建物群-研究の現状と課題-」『古代文化 特輯 北海道諸国の官衙遺跡-調査研究の現状と課題- 第52巻 第6号』(財)古代学協会 2000年 参照。

註2) 池澤俊幸「南四国における古代前期の土器様相-下ノ坪遺跡を中心として-」『下ノ坪遺跡 農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書-』高知県野市町教育委員会 1998年

註3) 池澤俊幸『土佐からみた平安時代の土器』『中近世土器の基礎研究Ⅳ 平安時代の土器・陶磁器研究』日本中世土器研究会 2000年

註4) 今次調査は具同中山遺跡群の一部であり、本遺跡群ではこれまでも数々の調査が行われている。故に、以下今次の調査区を指して今次調査と記す。

註5) これらの境界的な属性を示すものについては、より適合要素の多い方に帰属させている。例えば -6期で主流化するような属性を持つものがすでに -5期に出現しているが、本項ではそのような個体は -6期の方へ算入した。このような判断をした個体も少なからず存在した。

註6) Tab.97-3については 期から 期の区分が重複して表記されているが、これは個々の遺物の時期幅を考慮したものであり、カウント点数は重複して数えていない。平底・有台の表記は 期以降の杯Dなど、杯A・杯B系譜でないものを意識したものである。また、今次調査と船戸遺跡については、該当させた遺物の報告番号をTab.104、105に示した。Tab.97の点数は、Tab.104、105にさらに非実測のものを加えたものである。

註7) 下ノ坪遺跡の点数は、口縁部点数を原則としたものである。これに対して今次調査及び船戸遺跡では、Tab.97からわかるように底部の点数が多く、杯については口縁部ではなく底部片点数を使用した。検証のため、口縁部点数を使用したグラフも作成してみたが、そのプロポーシオンに対する認識自体に関わる差異はなかった。その他、時期区分の表記等については前掲Tab.97に準ず。

註8) 註3に同じ。

註9) 風指遺跡などでも同様である。『下ノ坪遺跡』p.244参照。

註10) 具体的には註2参照。

註11) 杯については底部の属性が必要なため、底部点数を使用している。註7参照。

註12) Tab.99では -4～5期に含まれたが、実際には下ノ坪遺跡の -4期の資料と白猪田遺跡SD1では杯Aの優越は確認できず、高知平野東部では -5期以降に一般に杯Aが杯Bを凌駕することが推測できる。

註13) Tab.99は土師器と須恵器を総合した数値によるが、問題としている 期では、今次調査及び船戸遺跡ではほとんどを須恵器が占める。それに対して土師器が一定量を占める下ノ坪遺跡で、須恵器に限って杯の組成をみたのがTab.103である。本図から、本文中にあるような杯の組成比に関する認識が、須恵器に限った場合でも適用可能なことが看取できる。

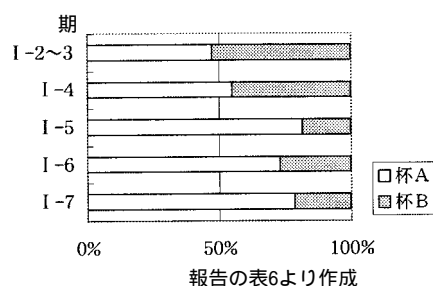
註14) 筆者計数。土師器と報告されているもののうち杯A 1点、杯B 3点を須恵器とした。

註15) 分類基準等については註2に拠る。今次の例はTab.104参照。

註16) 同区では遺物密度が濃厚で、遺構出土遺物群中にもいくらかの混入があるとみられ、全破片に立脚することが必ずしもより実態に近いとはいえないと考えた。

註17) 各報告及び廣田典夫『土佐の須恵器』1991年

註18) 『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会/(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1996年、『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会/(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1998年



Tab.103 下ノ坪遺跡H区遺構出土須恵器杯の組成比

- 註19) 片桐孝浩「讃岐における古代の土器様相」『土佐の土器・古代から中世へ-8世紀～10世紀の土器様相の展開-』第8回 四国中世土器研究会資料 1996年
- 註20) 佐藤竜馬「十瓶山窯跡群の須恵器とその検討課題」『香川考古第2号』香川考古刊行会 1993年、同「讃岐における須恵器の生産動向と群別」奈良国立文化財研究所 所内特別研究『古代律令国家の調納制を考える』発表資料 2000年。佐藤氏より御教示を得、資料を実見させて頂いた。
- 註21) 註19。佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題-北海道を中心に-』古代学協会四国支部第12回大会発表資料 1998年。
- 註22) 本村・横内遺跡、小山・南谷遺跡、空港跡地遺跡、正箱遺跡、国分寺下日名代遺跡、讃岐国府跡、下川津遺跡、川津中塚遺跡、川津一ノ又遺跡、郡家一里屋遺跡、郡家原遺跡、大浦浜遺跡の各報告による。
- 註23) ただし、高畑遺跡では少数ながらb形態の「須恵器」皿が報告されている。
- 註24) Tab.96から推定した -4期の年代観で、あくまでも他県と比較するための推測である。実年代観については以下同様。
- 註25) 製品の需給関係が証明されているのではない。
- 註26) 註20 佐藤1993を参照した。
- 註27) 報告書掲載分のみを対象としたことに関して、調査担当者からは、b形態のものに若干注意を払ったが、細片を総合しても数比が大きく変わるような様相や抽出方法ではないとの所見を得ている。
- 註28) 久家隆芳「神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -」高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年。鹿々場窯跡は、中筋川下流域の水系及び平野とは一応隔絶した他郷に所在する(『大方町史』大方町 1995年)。
- 註29) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 古津賀遺跡/具同中山遺跡群』高知県教育委員会 1988年・249ページ、『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年・199ページ参照。これらについては久家氏から、蓋「類」に比定できるかどうかは疑問とのコメントを得ているが、いずれにしても類似する形態で、高知平野ではみられないことが注意される。
- 註30) 國下多美樹「爪形状圧痕」を有する須恵器～長岡京出土土器の検討を通して～』『京都考古 第67号』京都考古刊行会 1992年
- 註31) 前者2遺跡については未報告分も観察した。いずれも外底周縁部が残存するものを母数とした。
- 註32) 調査担当者にも所見を頂いた。
- 註33) 註2に同じ。
- 註34) 『平成12年度 中村・宿毛道路高企画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 具同中山遺跡群 -3 記者発表及び現地説明会資料』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年
- 註35) 松田直則「四万十川流域の遺跡」『中近世土器の基礎研究XI』日本中世土器研究会 1996年
- 註36) 『松山市埋蔵文化財調査年報・平成元年～2年度』松山市埋蔵文化財センター 1991年
- 註37) 岩質については、愛媛県埋蔵文化財調査センター等で教示を得た。
- 註38) 比定した遺物の報告番号をTab.106に記す。
- 註39) 註36に同じ。
- 註40) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- 註41) 下ノ坪遺跡SX2は、その出土遺物群全体をみた場合にやや特異な様相も看取できる。

- 註42) 三好美穂「都城の煮炊具-藤原京・平城京・長岡京・平安京-」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4煮炊具-』古代の土器研究会第4回シンポジウム 1996年
- 註43) 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4煮炊具-』古代の土器研究会第4回シンポジウム 1996年、佐藤浩司「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1991年
- 註44) Tab.102では少数だが、小籠遺跡や西鴨地遺跡で一定、或いはまとめて出土している。
- 註45) 片桐孝浩「讃岐出土の東北系土器について～特に黒色土器について～」『研究紀要』(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1995年。松山平野の資料については栗田正芳氏の手を煩わせ、資料を拝見した。
- 註46) 『現地説明会資料 幸の木・久枝田遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1995年。柴田昌児氏の手を煩わせ、資料を拝見した。
- 註47) 佐藤浩司「ケズリのない甕-豊前企救型煮沸具の語るもの-」『研究紀要-第6号-』(財)北九州市教育文化事業団/埋蔵文化財調査室 1992年
- 註48) 註43 1996年、『古代の土器4煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会編 1996年

引用・参考報告書

高知県

- 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第1～6、8～11集』高知県教育委員会 1980～1991年
- 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第7集』南国市教育委員会 1987年
- 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 風指遺跡・アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989年
- 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書(土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集)』土佐山田町教育委員会 1990年
- 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書 具同中山遺跡群 第一分冊 1989・1990年度』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集 高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- 『土佐山田北部遺跡群-山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書-』土佐山田町教育委員会 1992年
- 『船戸遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『小籠遺跡 -あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996年
- 『白猪田遺跡-久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書-』南国市教育委員会 1997年
- 『下ノ坪遺跡 -農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書-』野市町教育委員会 1998年
- 『四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設に伴う土佐市 西鴨地遺跡 現地説明会・記者発表資料』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998年
- 『福井遺跡 四国横断自動車道(南国～伊野)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999年
- 『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡-中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 -』高知県教育委員会/(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年

愛媛県

- 『一般国道11号西条バイパス埋蔵文化財調査報告書 池ノ内遺跡 牛の角遺跡 天神山遺跡 原八幡神社裏遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1989年

香川県

- 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大浦浜遺跡』香川県教育委員会/本州四国連絡橋公団 1988年
- 『下川津遺跡 第1分冊』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/本州四国連絡橋公団 1990年
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第12冊 郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1993年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1993年
- 『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第14冊 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1994年
- 『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
- 『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1997年
- 『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第31冊 国分寺下日名代遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/日本道路公団 1999年
- 『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 八町地遺跡 本村・横内遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター 2000年
- 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡』香川県教育委員会/(財)香川県埋蔵文化財調査センター/香川県土地開発公社 2000年

徳島県

- 『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畑遺跡発掘調査概要報告書』徳島県教育委員会 1990年

期	土師器・土師質土器						黒色土器	須 恵 器								その他
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	杯・椀	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺	甕	
			平底	有台						平底	有台					
不	(4078)								939, 1636, 1650, 1806, 1808, 1810, 1811	1568, 1808, 1810, 1840, (4108)	939, 1636, 1640, 1641, 1642, 1811, (4112, 4119, 4120, 4124, 4125,)	1584, 1655, 1659, 1661, 1814, 1815, 1817		1666, 1668, 1671, 1667, (4150)	1334, 1665, 1673	壺蓋 1659, 1663
-4 ~ 5	1554	1540	1540					1369, 1556, 1600, 1608, 1610, 1611, 1648	1559, 1571, 1582, 1612, 1620, 1621, 1622, 1625, 1626, 1627, 1628, 1631, 1632, 1633, 1634, 1635, 1638, 1651, 1726	1571, 1612, 1620, 1621, 1622, 1625, 1626, 1628, (4100, 4106)	1332, 1357, 1553, 1555, 1582, 1627, 1631, 1632, 1633, 1634, 1635, 1638, 1639, 1643, 1646, 1648, 1649, 1813, 1835, (4116, 4122, 4123)	1354, 1531, 1652, 1653, 1654, 1656, 1658, 1662, 1664, 1660, (4083, 4128, 4129)	1333, 1586, 1606, 1609, 1614, 1618, 1619, 1623, 1624			
-6 ~ 7	1336 (4077)	(4079, 4080)	(4079, 4080)	(4127)	1664			1338, 1352, 1409, 1543, 1601, 1602, 1603, 1604, 1804, 1805, (4085, 4087, 4088)	1616, 1617, 1637, 1341, 1807, (4095, 4096)	1341, 1343, 1616, 1617, 1807, (4095, 4107)	1578, 1637, 1641, 1342, 1645, 1647	1353, (4133)				
		1346	1346	1596, 1597			1688									緑5, 6, 1686
																椀 1595, 1714, 1715, 1741, (4184)

数字は遺物図版番号。() 内は未報告分の実測番号。

Tab.104(註6) Tab.97-2具同中山遺跡群(今次調査)のうちの実測分

期	土師器・土師質土器						黒色土器	須恵器								その他
	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	杯・椀	皿	杯	(杯底部)		蓋	高杯	壺	甕	
			平底	有台						平底	有台					
不	36-17				55-6	737		37-4, 45-3, 57-8	37-6, 47-19, 57-26, 58-2, 58-24, 92-16, 17, 18, 13 0, 388, 396, 414, 421, 724, 772, 81 6, 834, 849, 856, 858, 877	47-17, 50-2, 57-26, 92-8, 98, 100, 216, 425, 568, 57 3, 593, 594, 616, 795, 80 3, 805, 809, 832	37-6, 47-17, 19, 50-2, 54-12, 58-4, 5, 14, 24, 32, 3 3, 34, 102, 390, 5 87, 592, 881	47-30, 713		48-1, 4, 60-16, 17, 18, 9 3-1, 2, 735, 758, 831, 83 5, 836, 837, 838, 839, 84 1, 844, 845, 846, 889	60-23, 62-1, 2, 7, 93-1 0, 104, 833, 89 7	壺蓋133
-2～3									57-13, 14, 15, 16, 17, 58-7, 47-24		47-2, 58-7	59-10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22				
-4～5								37-2, 3, 47-4, 6, 8, 9, 57-1, 10, 92-2, 807	47-15, 47-16, 18, 21, 25, 26, 57-18, 19, 20, 21, 22, 27, 58-1, 8, 9, 11, 12, 13, 18, 22, 23, 90-9, 92-3, 4, 30 6, 355, 396, 700, 766, 768, 771	47-15, 16, 1 8, 57-18, 19, 20, 21, 22, 2 7, 90-9, 92-3, 4, 202, 20 5, 355, 700, 704, 766, 77 1, 801, 808	47-21, 22, 25, 26, 58-1, 3, 6, 8, 9, 1 1, 12, 13, 15, 18, 19, 22, 23, 25, 26, 30, 31, 59-1, 386, 378, 394, 396, 40 3, 411, 417, 800, 802, 810, 812, 84 7, 894, 566, 695	37-1, 47-27, 28, 29, 31, 50-1, 59-8, 9, 23, 24, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 60-3, 4, 5, 6, 13, 14, 92-19, 20, 23, 137, 139, 712, 715, 732, 760, 82 8, 829, 893	59-3			
-6～7		90-17	90-17, 212	54-8, 558				45-6, 9, 12, 47-1, 2, 3, 5, 7, 10, 11, 12, 57-2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 11, 12, 92-1, 22, 25, 717, 729, 827, 818, 887, 895	36-2, 47-13, 14, 20, 23, 54-3, 57-23, 24, 25, 58-10, 17, 20, 27, 28, 29, 90-12, 15, 18, 92-5, 6, 7, 9, 12, 13	36-2, 47-13, 14, 54-3, 57-23, 24, 2 5, 90-12, 15, 18, 92-5, 6, 7, 9, 559, 691	45-19, 23, 26, 47-20, 23, 54-10, 11, 58-10, 16, 17, 20, 21, 27, 28, 29, 30, 31, 35, 59-2, 91-10, 92-12, 13, 14, 15, 103, 203, 385, 389, 391, 416, 57 7, 693, 813, 814, 880, 899	59-25, 60-1, 2, 7, 8, 11, 92-24, 26, 720, 721, 722, 72 5, 726, 798, 817, 821, 822, 823, 83 0, 865, 878, 879				
-1～2	45-2, 4, 5, 7, 8 53-2, 3, 4, 5, 6, 10, 885	53-26, 27, 31 90-10, 11	53-8, 26, 27, 31, 90-8, 10, 11, 91-4, 555	36-5, 6, 7, 8 45-24, 25, 28, 29, 30, 54-13, 14, 15, 16, 17, 91-6, 7, 8, 9, 561			49-8 65-9 679		45-21		45-21, 22, 27, 54-18					
～ -1	45-1, 53-12, 13, 549	45-17, 18, 53-28, 29, 54-21, 90-20, 552,	36-9, 10, 11, 12, 13, 14, 45-17, 18, 32, 33, 34, 35, 39, 40, 41, 42, 53-20, 24, 28, 29, 32, 54-21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 55-1, 2, 3, 4, 5, 90-20, 91-5, 28, 217, 283, 56 4, 580, 585, 647, 873	54-19, 20												緑49-6, 65-3, 4, 5, 6, 94-1, 2, 3, 4, 5, 6, 952, 灰49-7, 94-7, 8,
	53-11, 90-2	36-3, 45-13	45-13											61-1		椀か杯 91-1
不可分															48-13, 19-1, 2, 62-4	

表中の数字は、例えば36-17は報告書Fig.36の17を示す。同一Fig.で連続する場合は省略した。Fig.番号の付かない13桁数字は未報告分の実測番号。

Tab.105(註6) Tab.97-3船戸遺跡のうちの实測分

形態	胎土				不
a				1796	
b	1680	1682, 1501, (4162)			(4169)
c		1370, 1798			
d			1681, 1683, 1797, (4027, 4065, 4160, 4161, 4166, 4159, 4157, 5229)		
不				1347	

数字は遺物図版番号。() 内は未報告分の実測番号。

具同中山遺跡群(今次調査)

形態	胎土					不
a	918	56-2			55-10	55-11
b	46-7	56-1, 919, 938				
c	114	36-22, 46-1, 46-2, 46-3, 46-4, 46-5, 46-8, 55-9, 55-12, 56-3, 916, 945, 947				
d			36-18, 36-21, 55-8, 913, 914, 915, 917, 921, 946	55-7, 56-4		46-6
不	307				91-11, 91-13	

表中の数字は、例えば56-2は報告書Fig.56の2を示す。
Fig.番号の付かない3桁数字は未報告分の実測番号。

船戸遺跡

形態	胎土				不
a	234, 336, 453, 600, 601, 176, 976				
b	235, 294, 533	177, 277, 409, 534, 663, 761, A区1			236, 662, 748, F区189
c	395	1005			
d			337	293, 454, 602	
不	975				

特記しないものはH区。

下ノ坪遺跡

形態	胎土			不	不明
a	8-39				3-134
b		9-109			6-52, 2-16-9, 2-18-1
c	7-22	8-123			
d			8-21, 56, 11-19, 20, 36		6-23
不				9-108	6-43, 3-118

数字は、例えば8-39は8集の遺物番号39であることを示す。

土佐国衛跡

Tab.106(註38) Tab.102のうちの実測分